第 7 回「臺日文化交流教室」

講　題 / 演　題：

鄧麗君・心之旅—從時代解讀其身分認同

演講人 / 講演者：

平野久美子（作家）

▲會場一景

演講摘要：

大家平常是意識著「identity（身分認同）」在過生活的嗎？就我們日本人來說，大多數人應該都會回答「沒意識到」吧。1974 年，台灣出身的鄧麗君以藝名「Teresa Teng」在日本歌謠界出道。我認爲，從她在

講演摘要：

みなさんは、日頃「identity」を意識して生活をしているでしょうか？私たち日本人に限って言えば、意識していないと答える人がほとんどでしょう。1974年に、台湾出身の鄧麗君が「テレサ・テン」という芸名で日本歌謡界にデビューしました。彼女が日本で活躍した１５年ほどの間、私たちは歌声の裏にある台湾と中国の関係を知り、identityのありようを学んだように思います。

本講座では、アジアの歌姫として人気を博したテレサ・テンの魅力に改めて迫るとともに、彼女の心の旅路ともいうべき足跡を追ってみようと思います。

▲辻本雅史教授

第 7 回「台日文化交流教室」

2016.09.23

▲平野久美子女士

▲提問時間

日本活躍的 15 年當中，我們知曉了藏在她歌聲背後的台灣與中國的關係，並學到何謂 identity（身分認同）。

本演講中，將帶領大家重新認識紅極一時的亞洲歌姬——鄧麗君的魅力，同時探討她的“心路歷程”。

2015 年的秋天，我拜訪了鄧麗君娘家的親戚，行旅至西安。在中國，觸碰到傳奇歌姬的眞實面貌，知曉了她的煩惱。三個月後，也就是 2016 年 1 月，台灣實現了睽違八年的政黨輪替。讓時代變動的是，那些希求台灣能更加民主，將身分認同根植於台灣的平民百姓們。如果鄧麗君還活著的話……會如何評論現狀，會有什麼樣的感想呢？

針對鄧麗君的「identity（身分認同）」＝支持著「我就是我」的事物、成爲其憑藉的事物＝進行考察的同時，也想邀請在座的各位聽衆一同來思考「我是誰？」。✦

2015年の秋、私は鄧麗君の母方の親族を訪ね、西安まで旅をしました。中国ではすでに伝説化している歌姫の素顔に触れ、その懊悩も知りました。その３か月後の2016年1月、台湾では8年ぶりの政権交代が実現しました。時代を動かしたのは、台湾のさらなる民主化を希求し、台湾にアイデンティーを置く市井の人々です。もしも鄧麗君（テレサ・テン）が生きていたら・・・・このような現状をどう評価し、どんな感想をもったのでしょうか？

テレサ・テンの「identity」＝それは自分が自分であることをささえるもの、そのよりどころとなるもの＝を考察し、あわせてご出席のみなさんにも自分とは何者であるか？ということを考えていただけたらと思っております。✦

第 8 回「臺日文化交流教室」

講　題 / 演　題：

台灣、中國，以及日本—從秘史的角度思考三者關係

演講人 / 講演者：

吉村剛史（日本「産経新聞」岡山支局長）

演講摘要：

在人類歷史的暗處，總是脫離不了藥物的陰影。鹽巴、砂糖、胡椒、酒、香菸、茶、咖啡等調味料或嗜好品的延長線上，是古柯鹼或大麻、鴉片等的存在。

▲吉村剛史先生

在東亞，英國與清廷之間的不平等貿易而引發了鴉片戰爭（1840 ～ 42），此後鴉片問題也長久困擾著清廷與中國。另一方面，甲午戰爭（1894 ～ 95）結束後中日簽訂馬關條約，清廷割讓台灣給日本。接收台灣的日本雖企圖將台灣作爲富國強兵的踏板、糧食增產的據點，但眼時的台灣卻存在著大量鴉片中毒患者的困境。

對此問題，總督府民政長官後藤新平實施鴉片專賣制度，採用漸進政策的手法抑制

講演摘要：

人類の歴史の陰にはつねにドラッグの影がつきまとう。塩、砂糖、胡椒、酒、タバコ、茶、コーヒーといった調味料、嗜好品の延長にはコカインや大麻、アヘンが存在する。

東アジアも同様で、英国と清国の貿易不均衡に端を発したアヘン戦争(1840～42)の結果は長く清国、中国を苦しめた。一方、日清戦争(1894～95)の結果、下関(馬関)条約で清国から台湾の割譲を受けた日本は、当時の台湾に存在した多数のアヘン中毒者患者の問題が、富国強兵の足がかり、食糧増産の拠点としたい意向の前に障害となった。

結局この問題では、総督府の民政長官、後藤新平がアヘンの専売制を敷き漸禁政策を

第 8 回「台日文化交流教室」

2016.12.09

▲學生提問

鴉片吸食人數，但同時也不得不給予「藥用鴉片」給鴉片中毒患者。

購買來自當時世界大國——英國的印度・波斯產鴉片，將造成大量的外幣流失。日本爲避免此情況發生，接納了自江戶時代起，有栽培罌粟花實作經驗，位於大阪的三島郡福井村（現茨木市）的農業專家——二反長音藏的建言，決定選擇自給自足之道。

鴉片可進一步精煉成嗎啡，甚至是海洛因。第一次世界大戰之後，罌粟因爲可作成止痛藥，成爲重要的軍需物資。台灣的鴉片中毒患者在日治時期的 50 年間雖幾乎根絕，但日本的罌粟種植卻伴隨著時代的需求而逕自發展，達到世界屈指可數的規模。

此外，中國的軍閥之間也有鴉片的利益爭奪，他們將鴉片作爲內戰資金，藉此來擴大自身的勢力。

我將以台灣爲主軸，並跨及日本與中國，介紹從鴉片所見的近代史。✦

とったが、一方で中毒者に与える「薬用アヘン」の必要に迫られた。

当時の大国、英国のインド・ペルシャ産アヘンを購入することで貴重な外貨を失うことを憂慮した日本は、江戸期以来、ケシ栽培の実績のある大阪の三島郡福井村（現在の茨木市）の篤農家、二反長音蔵の建白を容れ、自給自足の道を選ぶ。

アヘンはモルヒネ、ヘロインに精製される。第一次大戦以降、鎮痛剤としてケシ栽培は重要な軍需物資となった。台湾のアヘン中毒者は日本統治時代の50年間でほぼ根絶されたが、ケシ栽培はこうした時代の要請に伴い独自に発展、世界有数の規模となった。

一方、中国大陸でも軍閥によるアヘン利権の争奪があり、内戦の資金として勢力拡大に利用された。

台湾を軸に、日本、中国にまたがるアヘンからみる近代史を紹介する。✦